

2 湯河原町の歴史的資源を活用した観光活性化 老舗旅館の再生を契機に温泉街の歴史が甦る

神奈川県・湯河原町 | 横浜銀行

湯河原温泉を長く牽引してきた「富士屋旅館」が、伝統と面影をそのままに、多くの人の想いのもとで再出発する。

日本有数の温泉街は、官民挙げた取組みで、歴史的資源でもある老舗旅館を中心に新たな価値を創造し、湯河原ならではの「違いの分かる大人の癒し場」づくりを目指している。



富士屋旅館

湯河原町の概要

- 【人口】24,321人(2018年3月1日現在)
- 湯河原町は、神奈川県西南端に位置し、三方を箱根外輪山や伊豆・熱海の人々に囲まれ、南東側は相模灘に接している。新幹線を利用すれば約60分と首都圏からのアクセスも良い。
- 沖合を流れる黒潮の影響により冬は暖かく夏は比較的涼しい、温暖な気候。
- 湯河原温泉は古くは万葉の時代から温泉地として知られており、肌にやさしい泉質。山林には景観を愉しめる遊歩道やハイキングコースがあり、海岸線も近く、夏は海水浴を愉しめる。



湯河原駅前広場

歴史ある温泉観光地の苦境

古くは万葉集に詠まれ、江戸後期の温泉番付で「東の小結」に位置付けられ、明治以降は多くの作家の創作の場、安らぎの場として愛されてきた湯河原温泉。箱根、熱海の二大温泉地に挟まれ、近年は、じわじわと観光客が減り、ここ10年で日帰り客、宿泊客ともに4割程度減少する厳しい状況にあった。



明治時代の湯河原温泉場

自治体や企業の保養所の閉鎖もあるが、「一泊二食付で宿泊される方は旅館に籠る傾向が強く、飲食店や物販店の廃業が相次いだ。以前は源泉の近くに集中していた旅館が、温泉のポンプアップが可能になったことで山の上などに拡散してしまい、温泉街の賑わいが失われてしまったことも影響している」（湯河原温泉まちづくり協議会 山本一郎会長）

温泉街の中心地に位置し、建物の一部は明治時代に建築された歴史的建造物である「富士屋旅館」。長年にわたって湯河原を牽引してきたこの老舗旅館は、2002年から休業状態にあり、湯河原の苦境の象徴であったと、地元関係者は口をそろえる。

老舗旅館の再起と湯河原町の面的活性化

最近、湯河原では体験コーナーを併設した菓子メーカー本社工場や会員制リゾートホテルがオープンしたほか、湯河原駅前広場がリニューアルされるなどの拠点整備事業が進められている。

「湯河原を盛り上げていこう」。そんな機運が高まるなか、「湯河原町の歴史的資源を活用した地域活性化に向けた連携協定」が締結された。

湯河原町、湯河原温泉まちづくり協議会、一般社団法人ノオト(ま

ちづくり支援会社)、地域経済活性化支援機構、横浜銀行の5者による本協定は、富士屋旅館の再起を目指すとともに、これを契機に湯河原が一体となった活性化を目指す。

富士屋旅館は、横浜銀行と地域経済活性化支援機構が組成した「かながわ観光活性化ファンド」からの投融資により、本年夏頃のリニューアルオープンを予定している。

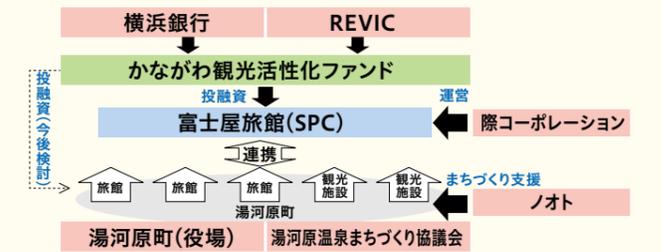
建物のうち歴史的価値が高い明治・大正期に建築された部分は、

外観はそのままに内部をリノベーション。ゆったりとした造りの18の客室に生まれ変わる。昭和期の建築部分は、外観を含めて改修し、大浴場のほか、レストランやカフェスペースを提供する。建物のみでなく、歴史もあり、文人に愛された旅館といったイメージも大切にすることが基本コンセプトとなっている。

大人の癒し場をコンセプトとした景観整備

湯河原は、趣深い旅館が立ち並び、著名な作家・画家が逗留するのみでなく、都心の旦那衆・経営者が羽を伸ばしに訪れるなど、違いの分かる「大人」に愛されてきた歴史を持つ。

連携協定のコンセプトは、「湯河原温泉郷の伝統と情緒を活かした活性化プラン」。「湯河原の、静かで穏やかな佇まいは、普段都



心で忙しく働いており、癒しを求めている方々にぴったり。そうした思いから、ストレートに癒し場を活性化のキーワードとして打ち出している（地域経済活性化支援機構 米森智基マネージャー）

これまで景観整備は町が中心となって進めてきたが、店舗改修など個々の事業者の案件を公的機関が支援することには限界があるため、ノオトが資本参加・人的支援を行い、中間支援組織である「株式会社癒し場へ」が設立された。

「私たちは、『木造を守り、活かす』、『落ち着いた色彩の緩やかな傾斜屋根で温泉場ならではの風景を引き立てる』などの景観づくりのポイントをまとめて、旅館やお店が建物改修を行う際の参考にしてもらったり、空き店舗の活用のアドバイスなどを行っている。横浜銀行が中心となって富士屋旅館の再生が決まったので、こうした面的な取組みを加速させていきたい」と社の中西佳代子執行役員は意気込む。

どうにかしたいという「想い」

湯河原町の富田幸宏町長は、「湯河原町の活性化に向けて多面的な取組みを進めているが、そのランドマークとなるのが富士屋旅館だと思う。老舗の富士屋旅館が、往時の趣を残して再生されれば、湯河原の歴史がもう一度甦るような、地元関係者の心の刺激になるのではないかと。最初に横浜銀行から富士屋旅館の再生の話聞いたとき、ビジネスとして成り立つのかといった不安もあったが、地域金融機関としてどうにかしたいという強い想いを感じたし、方向性が見えたときは、本当に単純に嬉しかった」と熱く語る。

旅館が立ち並び「湯元通り」の石畳舗装や街灯建て替えによる通りの修景、観光客の回遊拠点となっている「万葉公園」の整備、空き家・空き店舗の活用による賑わい創出。様々な関係者が有機的に連携し

ながら、湯河原の活性化という一つの方向を見据えて動いている。「地方銀行は地域との運命共同体であると思っている。『癒し場へ』が設立された際に、地域を活性化させたいという想いをもって当行に相談に来てくれて、ありがたいと感じたし、しっかり取り組んでいこうという想いが更に強まった」（横浜銀行湯河原支店 横澤和敬支店長）

湯河原町を何とかしたいという、みんなの想いが湯河原町の再生の象徴である富士屋旅館に注がれている。



万葉公園

Data

旅行に行ったらお土産は買いますか…？

JTBの2013年の調査によると、旅行に行った際にお土産を「必ず買う」または「たまに買う」と回答した人は9割を超えており、購入する場所は「観光地などのお土産店」が最も多いようです。観光地を散策しながら、地元ならではの美味しいものや、記念の品を買うことも旅行の楽しみの1つです。ちなみに、誰にお土産を買って帰るのかとの質問には、半数以上の方が「家族」または「自分」としています。

